新刊書紹介

淡水藻類入門

山岸高旺編著

内田老鶴圃 (1999年)/B5版, 646頁, 25,000円

「淡水藻類の形質・種類・観察と研究」という副題のついた本書は、編者を始めとするそれぞれの分野の専門家16名による本邦初の淡水藻類に関する成書である。「Ⅰ淡水藻類の形質」では、淡水藻類の細胞、体制、生殖と生活史、分布と伝播、分類系など全体の共通事項について解説されている。「Ⅱ淡水藻類の種類」では、藍藻、紅藻、黄色鞭毛藻、黄緑色藻、珪藻、褐色鞭毛藻、渦鞭毛藻、緑色鞭毛藻(ラフィド藻)、褐藻、緑虫藻(ミドリムシ類)、緑藻、車軸藻(シャジクモ類)などの各藻類群の目、科、属の解説と属内の数種についての説明が、本邦産の身近に観察できる藻類を中心に約450属を取り上げて各分類群の特徴が線画をふんだんに取り入れて解説され、検索表にも線画を入れて工夫がなされ、利用者のために便宜が図られている。本書全体の1/2を占めるⅠとⅡは編者一人が通して執筆しており、一貫して統一がとれ、解り易い記述となっている。「Ⅲ淡水藻類の観察と研究」では、採集と観察、標本の整理、研究分野などに関する全般的な解説に始まり、編者を含む淡水藻類を対象として活発に活動している専門家が16項目にわたってそれぞれの分野に関連した種々の観察法ならびに研究法について平易に説明しており、顕微鏡写真の撮影法、学名の解説、種の同定と記載、文献の収集についての解説の項目もある。

形態学的にも生態学的にも著しく多様で多くの分類群にまたがる数多くの種を含む淡水藻類に関して、これまで特定の分類群や分野についての成書はいくつかあったが、広範にわたる淡水藻類の全容を系統的に一貫性をもってまとめた学術書は本書が初めてである。淡水藻類を対象とする若い研究者や大学院生には必携の書であり、図や写真を数多く取り入れた初心者にも解り易い記述は、湖沼や河川の現場で水産にかかわる基礎的あるいは応用的調査研究に携わっている人たちが藻類について知ろうとする際に大いに参考になるであろう。

(東京農大 有賀祐勝)

Management of freshwater fisheries

Jacques Arrignon

A. A. Balkema (1999年)/B5版, 582頁, 85EUR

フランス人の著者による淡水漁業の管理について、非常に広範囲の話題をカバーした参考書である。もともとフランス語で出ていたものの英語訳である。現場で実際に管理に携わっている人々に有用であるように、科学的議論より、確証された実際的情報を提供することをめざしていると、前書きに述べられているが、その通りの本であり、その目的は達成されているのではないかと思う。

Ecological Fundamentalsと題されたパート1(約190ページ)では、水塊の物理的特性、生態系を構成する化学物質やさまざまな生物、魚類の形態、解剖、分類、生理・生態・行動の基礎的解説、そして資源調査法の基礎が解説される。Fish Breedingと題されたパート2(約180ページ)では人工繁殖手法(主要魚種ごとの解説を含む)や魚病、養殖池の汚染や水質まで増養殖に関係したさまざまな話題が解説される。Management of Aquatic Mediumsと題されたパート3(約130ページ)では、魚道などを含む物理的管理手法、漁獲や放流の管理、そして漁業管理に関連する経済的要素について、それぞれ一章がさかされている。また、個体数推定や水質評価のための公式などが最後にAppendixとしてまとめられている。

大量の情報を一冊にまとめたものであるため、説明は、ある手法なり技術を使えるために必要な最小限のもので、非常にあっさりしている。たとえば、標識再捕による個体数推定法であるPetersen法については、点推定値の式と信頼範囲を求めるためのClopperとPetersenの図の使い方が、1ページ半のスペースを使って書かれているだけである。また、引用文献も少なく、あってもフランス語のものがほとんどである。だから、本文の内容のさらに詳しい解説を引用文献に求めることは、多くの場合、不可能である。フランスに淡水の水産職の公務員試験があるなら、その参考書という感じでもある。通読すれば物知りになれそうだが、必要な事項について拾い読みするような目的のほうが役立ちそうである。

本書の内容には増養殖のしめる割合が高い。また、事例はフランスのものが中心である。類似のタイトルの書にアメリカ水産学会刊のInland Fisheries Management in North America (2nd ed.)があるが、こちらには増養殖は少なく、自然の魚の管理に関する内容が主で、例はアメリカ中心である。(三重大生物資源 原田泰志)